

---

## 第二次世界大戦期イギリスの地中海における帝国防衛 ——クレタ防衛戦とマルタ包囲戦を中心に——

伊藤 頌文

### <要旨>

本稿は、第二次世界大戦における地中海戦域の攻防をイギリスの帝国防衛という視点で再構成し、なかでもクレタ防衛戦やマルタ包囲戦といった事例に着目する。イギリスにとって地中海は、植民地と非公式な勢力圏が入り混じる要衝として歴史的にも重視されてきた。そのため、第二次世界大戦における地中海戦域の行方は、イギリスの帝国防衛に直結する重大な問題であった。「非公式帝国」の一部に位置付けられたクレタでは、他の地域との兼ね合いから十分な防衛態勢を敷くことができず、最終的にイギリスは同島を失陥するに至った。一方、直轄植民地であり軍事的拠点としても重要であったマルタは帝国の命運をも左右すると考えられ、多大な防衛努力が払われて包囲戦を凌ぎ切った。しかし、大戦で疲弊したイギリスが、戦後の国際情勢下で帝国を維持することはできなかった。その意味で、第二次世界大戦はイギリス帝国が解体へと向かう契機となり、地中海の攻防はその1つの象徴であった。

### はじめに

第二次世界大戦は、現代世界の歴史における1つの分水嶺であった。ヨーロッパとアジア太平洋を主戦地として6年間にわたって戦われ、数千万人という膨大な犠牲者を出した未曾有の大戦は、各参戦国にとって文字通りの総力戦となり<sup>1</sup>、さらにイデオロギーと戦争が結び付いたことで、極限の状況が各地で出現することになった<sup>2</sup>。一方、世界各地に植民地を有するヨーロッパの国々にとって、この大戦は帝国の戦争でもあった。ヨーロッパとアジア・アフリカをめぐる攻防が連動し、植民地からも兵士を募る

---

1 この点を強調した直近の業績として、石津朋之『総力戦としての第二次世界大戦——勝敗を決めた西方戦線の激闘を分析』(中央公論新社、2020年)。

2 Mark Mazower, *Dark Continent: Europe's Twentieth Century* (London: Allen Lane, 1998); Timothy Snyder, *Bloodlands: Europe between Hitler and Stalin* (New York: Basic Books, 2010); Timothy Snyder, *Black Earth: The Holocaust as History and Warning* (New York: Tim Duggan Books, 2015); 大木毅『独ソ戦——絶滅戦争の惨禍』(岩波新書、2019年)など。

など宗主国との紐帯を強める側面があった反面、各国は戦争を通じて著しく疲弊し、それが戦後の脱植民地化の趨勢につながっていく。その意味において、第二次世界大戦は、近代植民地帝国の歴史においても1つの画期をなした<sup>3</sup>。

なかでも、近代における最大の帝国を打ち立てていたイギリスは、各地の植民地や勢力圏から資源や人員を徴収し、この大戦を戦い抜くことになった。ヨーロッパ戦線における立ち位置はいうまでもなく、アジアにおいても植民地をめぐる日本と交戦するなど、イギリスは開戦から終戦まで一貫して主要なアクターであった。その一方で、同国は戦勝国となったものの膨大な国力を消耗し、最終的に戦後の脱植民地化と帝国の解体をみることになる。

このような文脈を踏まえて、本稿では第二次世界大戦の地中海戦域 (Mediterranean Theatre) におけるイギリスの動向に焦点を当てる。地中海戦域は、ヨーロッパ戦線の帰趨を左右するのみならず、イギリスの帝国防衛にとってもきわめて重大な意味をもった。最大の植民地であったインドに接続する「エンパイア・ルート (Empire Route)」の要衝として<sup>4</sup>、イギリス帝国の歴史において地中海は一貫して重視されてきた。折しも枢軸国側からの挑戦が強まるなかで、地中海戦域の戦いは、この地域をめぐるイギリスの帝国政策にいかなる影響をおよぼしたのだろうか。本稿では、特にクレタ防衛戦とマルタ包囲戦に着目し、地中海におけるイギリスの帝国防衛の諸相を明らかにすることを試みる。

第二次世界大戦を扱う文献は文字通り膨大であり、それは地中海戦域についても例外ではない<sup>5</sup>。当地における海軍力や海上覇権の議論はもとより、航空戦でも地中海の戦いがしばしば登場するほか<sup>6</sup>、クレタやマルタといった個別の事象に関しても、様々な切り口で豊かな知見が蓄積されてきた<sup>7</sup>。ひるがえって、第二次世界大戦期のイギリ

3 帝国の解体と脱植民地化の意義を強調しつつ20世紀の歴史を通観する著作として、佐々木雄太『国際政治史—世界戦争の時代から21世紀へ』(名古屋大学出版会、2011年); 木畑洋一『二〇世紀の歴史』(岩波新書、2014年)など。

4 「エンパイア・ルート」については、木畑洋一『帝国航路を往く—イギリス植民地と近代日本』(岩波書店、2018年)も参照。

5 近年の文献として、Simon Ball, “The Mediterranean and North Africa, 1940–1944,” in *The Cambridge History of the Second World War, Volume I: Fighting the War*, eds. John Ferris and Evan Mawdsley (Cambridge: Cambridge University Press, 2015), pp. 358–388; Craig L. Symonds, *World War II at Sea: A Global History* (New York: Oxford University Press, 2018), chaps. 5, 14; Richard Hammond, *Strangling the Axis: The Fight for Control of the Mediterranean during the Second World War* (Cambridge: Cambridge University Press, 2020).

6 Phillips Payson O’Brien, *How the War was Won: Air-Sea Power and Allied Victory in World War II* (Cambridge: Cambridge University Press, 2015) など。

7 Douglas Austin, *Malta and British Strategic Policy 1925–43* (London: Frank Cass, 2004); Greg Kennedy, “Sea denial, interdiction and diplomacy: The Royal Navy and the role of Malta, 1939–1943,” in *The Royal Navy and Maritime Power in the Twentieth Century*, ed. Ian Speller (London: Frank Cass, 2005), pp. 50–66; Stephen Prince, “Air power and evacuations: Crete 1941,” in *The Royal Navy and Maritime Power in the Twentieth Century*, pp. 67–87; David Stubbs, “Reappraising the Royal Air Force Contribution to the Defense of Crete, 1941,” *The Journal of Military History*, vol. 84, no. 2 (April 2020), pp. 459–486.

ス帝国と地中海の関わりにおいて<sup>8</sup>、両事例を主軸に据えるものは少ないように思われる。そこで本稿は、第二次世界大戦におけるイギリスの帝国防衛という視角から2つの事例を再整理し、地中海の戦いと同国の帝国政策の相互連関を検討する。この作業を通じて、大戦期の経験がイギリス帝国に与えた影響と、その歴史的意義の一端を示すことを目指したい。

## 1. イギリス帝国と地中海の歴史的位相

### (1) 地中海におけるイギリスの海上覇権

イギリスは19世紀に「パクス・ブリタニカ (Pax Britannica)」と呼ばれる帝国の全盛期を迎え、地中海でも覇権を謳歌した。また、その権益を下支えする存在として、イギリス海軍 (Royal Navy) が果たした役割については多言を要すまい<sup>9</sup>。1869年にはスエズ運河が開通し、イギリス帝国にとって最大かつ最重要の植民地であったインドに至る「エンパイア・ルート」が確立すると、地中海の戦略的な重要性も一層高まり、ジブラルタルやマルタ、キプロスといった各拠点を連結する形で軍事的権益が基礎付けられた<sup>10</sup>。

また、直轄植民地のほかにも、政治的・経済的にイギリスの支配がおよぶ地域が世界各地に広がり、「非公式帝国 (Informal Empire)」として同国の影響力を体現した<sup>11</sup>。地中海において、その好例に挙げられるのがギリシャである。19世紀前半のギリシャ独立戦争への介入に始まり、独立後もギリシャとの緊密な関係を築いたイギリスにとっ

8 たとえば、Michael Simpson, "Superhighway to the World Wide Web: The Mediterranean in British Imperial Strategy, 1900–45," in *Naval Strategy and Policy in the Mediterranean: Past, Present and Future*, ed. John B. Hattendorf (London: Frank Cass, 2000), pp. 51–76; Douglas E. Delaney, "Churchill and the Mediterranean Strategy: December 1941 to January 1943," *Defence Studies*, vol. 2, no. 3 (Autumn 2002), pp. 1–26; Robert Holland, *Blue-Water Empire: The British in the Mediterranean since 1800* (London: Allen Lane, 2012), chap. 7. また、大戦中のイギリスおよび帝国の動向は、David French, "British Military Strategy," in *The Cambridge History of the Second World War, Volume I*, pp. 28–50; Ashley Jackson, "The British Empire, 1939–1945," in *The Cambridge History of the Second World War, Volume II: Politics and Ideology*, eds. Richard Bosworth and Joseph Maiolo (Cambridge: Cambridge University Press, 2015), pp. 558–580.

9 イギリスの海上覇権を論じた古典的名著として、Paul Kennedy, *The Rise and Fall of British Naval Mastery* (London: Penguin, 2017). また、田所昌幸編『ロイヤル・ネイヴィーとパクス・ブリタニカ』(有斐閣、2006年)も参照。

10 Paul Caruana-Galizia, "Strategic colonies and economic development: real wages in Cyprus, Gibraltar, and Malta, 1836–1913," *The Economic History Review*, vol. 68, no. 4 (2015), pp. 1250–1276.

11 この点は、John Gallagher and Ronald Robinson, "The Imperialism of Free Trade," *The Economic History Review*, New Series, vol. 6, no. 1 (1953), pp. 1–15; P.J. Cain and A.G. Hopkins, *British Imperialism: 1688–2015*, 3rd ed. (London: Routledge, 2016); 半澤朝彦「液化化する帝国史研究——非公式帝国論の射程」木畑洋一、後藤春美編著『帝国の長い影——20世紀国際秩序の変容』(ミネルヴァ書房、2010年) 3–24頁などを参照。また、同様の視点に基づく通史的著作として、秋田茂『イギリス帝国の歴史——アジアから考える』(中公新書、2012年)。

て、当地は広域的な権益を維持する後背地となった。表面上は主権国家同士であったものの、両国の関係は多分に帝國的な要素を含み、それはクレタの帰属をめぐる問題などで如実に表れたが、政治的な結び付きは総じて強く<sup>12</sup>、ギリシャ防衛にイギリスが深く関与する重要な伏線にもなる。

そして先に触れたように、地中海の海上覇権を論じるうえで、イギリスの圧倒的な海軍力は決定的な意味をもった。その重責を担う地中海艦隊 (Mediterranean Fleet) の司令長官 (Commander-in-Chief) は、イギリス海軍において特に榮譽ある職位の代表格であった<sup>13</sup>。そして、各地に設けられた海軍基地のなかでも、マルタの海軍工廠は地中海艦隊の拠点としてイギリスの軍事的プレゼンスを象徴した<sup>14</sup>。同島の重要性は、かかる歴史的な文脈において醸成されていったのである。

## (2) 地中海の国際政治とイギリス

国際情勢に目を転じれば、イギリスは一貫して近代ヨーロッパ国際政治の中心的なアクターであり続けた<sup>15</sup>。地中海では、伝統的な対抗勢力であるフランスとの歴史的な対立関係に加えて、ロシアとの政治的・軍事的緊張がしばしば生じたし、ドイツやイタリアといった新興勢力の伸張も看過できない問題となった。20世紀に入ってイギリスの国力が次第に減退していくなかでも、同国にとって「エンパイア・ルート」の要たる地中海の地位は揺るがなかった。

一方、第一次世界大戦を契機として、イギリスはヨーロッパと帝国の双方に対応する軍事的な余裕を失いつつあった。依然として英連邦 (British Commonwealth) とスターリング圏 (Sterling Bloc) を中心とする貿易体制が強固であり、しかも帝国内の経済的相互依存は戦時の動員にも直結する問題であったため、帝国防衛の誓約の遵守はイギリス本国の防衛にとっても死活的な意味を有した<sup>16</sup>。だからこそ、とりわけ1920年代のイギリスはヨーロッパへの積極的な外交を展開し、効果的な大陸関与を模索したのである<sup>17</sup>。

12 イギリスとギリシャの複雑な関係性は、Robert Holland and Diana Markides, *The British and the Hellenes: Struggles for Mastery in the Eastern Mediterranean 1850–1960* (Oxford: Oxford University Press, 2009); Anastasia Yianguou, George Kazamias and Robert Holland eds., *The Greeks and the British in the Levant, 1800–1960s: Between Empires and Nations* (London: Routledge, 2016) など。

13 Holland, *Blue-Water Empire*, p. 334.

14 Carmel Vassallo, “Servants of Empire: The Maltese in the Royal Navy,” *Journal of Mediterranean Studies*, vol. 16, no. 1-2 (2006), pp. 273–289.

15 19世紀のヨーロッパ国際政治とイギリス外交については、君塚直隆『パクス・ブリタニカのイギリス外交——パーマストンと会議外交の時代』(有斐閣、2006年)。

16 赤木完爾『第二次世界大戦の政治と戦略』(慶應義塾大学出版会、1997年) 49–50頁。英連邦については、小川浩之『英連邦——王冠への忠誠と自由な連合』(中公叢書、2012年)も参照。

17 大久保明『大陸関与と離脱の狭間で——イギリス外交と第一次世界大戦後の西欧安全保障』(名古屋大学出版会、2018年)；藤山一樹『イギリスの対独「宥和」一九二四—一九三〇年——ヨーロッパ国際秩序の再編』(慶應義塾大学出版会、2019年)。

しかし1930年代に入ると、ドイツの独裁者となったアドルフ・ヒトラー (Adolf Hitler) の台頭に伴ってヨーロッパ国際秩序が動揺するとともに、植民地をめぐる諸国間の争いも激化するなかで、イギリスは困難な対応を迫られた。地中海においては、ベニート・ムッソリーニ (Benito Mussolini) 率いるファシスト・イタリアの膨張政策の矛先が、北アフリカのみならずマルタやキプロスなどイギリスの戦略的要衝にも向けられた<sup>18</sup>。また、ヒトラーの野望も、その主たる標的は東欧地域であったとはいえ、最終的に世界規模の権益をもつイギリスとの衝突は避けられなかった。その意味で、第二次世界大戦はイギリス帝国にとっても重要な戦いとなり、それは「エンパイア・ルート」の要である地中海でも同様であった。

## 2. 第二次世界大戦中の地中海戦域とイギリスの帝国防衛

第二次世界大戦のヨーロッパ戦線において、当初ナチ・ドイツの勢いに押されたイギリスは、主要な同盟国であったフランスが早々に降伏したこともあって<sup>19</sup>、ほぼ一国での戦いを強いられた。その後の激しい攻防のなかで、地中海でもイギリスは枢軸国側と対峙することになる。ヨーロッパと北アフリカという2つの戦線を結節する重要な地域として、地中海は双方の陣営から注視された。そこで以下では、地中海の島嶼をめぐる重要な攻防として、イギリスが深く関与したクレタとマルタの事例を取り上げ、同国の帝国防衛との関わりを中心に検討していく。

### (1) クレタ防衛戦

#### ア クレタをめぐる両陣営の思惑

ヨーロッパに戦争の足音が近づくなかで、先立ってイギリスとフランスはバルカン半島の国々に軍事的な保証を与えていた。特にギリシャは、1939年4月にイタリアがアルバニアを武力で併合したため、安全保障上の脅威認識を高めた<sup>20</sup>。開戦後の1940年5月末、イギリスの戦時内閣 (War Cabinet) は参謀長委員会 (Chiefs of Staff

18 Alexis Rappas, "The Transnational Formation of Imperial Rule on the Margins of Europe: British Cyprus and the Italian Dodecanese in the Interwar Period," *European History Quarterly*, vol. 45, no. 3 (July 2015), pp. 467–505; 石田憲「帝国をめぐる「文化外交」——伊英関係におけるマルタ言語問題」『思想』第1107号 (2016年7月) 60–76頁。地中海における第二次世界大戦の起源を論じた著作として、Reynolds M. Salerno, *Vital Crossroads: Mediterranean Origins of the Second World War, 1935–1940* (Ithaca: Cornell University Press, 2002) も参照。

19 第二次世界大戦におけるフランスの政治と外交については、宮下雄一郎『フランス再興と国際秩序の構想——第二次世界大戦期の政治と外交』(勁草書房、2016年)に詳しい。

20 Mark Mazower, *Hitler's Empire: How the Nazis Ruled Europe* (London: Allen Lane, 2008), pp. 63, 122.

Committee: COS) より、イタリア軍がギリシャに進攻した場合、英仏両国が共同でクレタを占領するという緊急対応策の報告を受けた<sup>21</sup>。しかし、性急な動きで逆にイタリアを刺激することへの懸念も強く、イギリス政府としては慎重にならざるを得なかった<sup>22</sup>。

ほどなくフランスがドイツに降伏したため、ギリシャ防衛は専らイギリスが責任を負うことになり、クレタにも相当数の対空兵器と戦闘機が必要であると指摘された。だが、この地域を所管する中東イギリス軍はきわめて広い範囲を担当しており、東西はジブラルタルからイラクまで、さらに南はアフリカ大陸のサブサハラ地域をも含んでいた。資源のほとんどは中東に注ぎ込まれ、クレタを防衛する人員や装備の不足は明らかであった<sup>23</sup>。

1940年10月、ムッソリーニの命令を受けてイタリア軍がギリシャに進攻したものの、当初はギリシャ軍によって撃退された。これは連合国側にとって、ヨーロッパ戦線の地上戦における初めての勝利でもあった<sup>24</sup>。また、イギリスは上述の緊急対応策に基づいてクレタに進駐し、島の北部にあるスタ湾が燃料補給の基地となったほか、3つの飛行場も設置された。しかし、その戦略は総じて状況対応型なものであり、11月14日にクレタに派遣されたイギリス空軍 (Royal Air Force) の戦闘機は性能面で劣るのみならず、3か月におよぶ利害対立の挙句にようやく配備された有様であった<sup>25</sup>。

その後、1941年4月に大挙して進攻したドイツ軍がわずか1か月でギリシャ本土を占領したため<sup>26</sup>、同国の政府と王室はクレタに逃れることを余儀なくされた。イギリスのウィンストン・チャーチル (Winston Churchill) 首相はクレタの重要性をあらためて強調し、兵員の再配置を指示するなど、同島の防衛に注力する姿勢をみせた。しかし、中東でのイギリス空軍機の配備状況は依然として低調であり、それがクレタ防衛におよぼす影響についても検討されないなど<sup>27</sup>、その態勢はきわめて脆弱であった。

21 WP (40) 175 (Also COS (40) 403), Report by the Chiefs of Staff Committee, "Seizure of Crete in the event of Italian Hostilities," May 29, 1940, CAB 66/8, The National Archives of the United Kingdom, Kew, London [以下 TNA と略記]。

22 Salerno, *Vital Crossroads*, pp. 202–203.

23 Stubbs, "Reappraising the Royal Air Force Contribution to the Defense of Crete, 1941," p. 461.

24 Peter Ewer, "The British Campaign in Greece 1941: Assumptions about the Operational Art and Their Influence on Strategy," *The Journal of Military History*, vol. 76, no. 3 (July 2012), p. 729.

25 Prince, "Air power and evacuations," p. 74; Stubbs, "Reappraising the Royal Air Force Contribution to the Defense of Crete, 1941," pp. 462–463.

26 ギリシャの戦いについては、Craig Stockings and Eleanor Hancock, "Reconsidering the Luftwaffe in Greece, 1941," *The Journal of Military History*, vol. 76, no. 3 (July 2012), pp. 747–773; David Stubbs, "Politics and Military Advice: Lessons from the Campaign in Greece 1941," *Air Power Review*, vol. 17, no. 3 (Autumn/Winter 2014), pp. 102–126 など。公式戦史の分析として、Christopher Buckley, *Greece and Crete 1941* (London: Her Majesty's Stationery Office [HMSO], 1952), pp. 3–142 も参照。

27 Confidential Annex, WM (41) 41st Conclusions, Minute 2, April 17, 1941, CAB 65/22, TNA; From Foreign Office to Athens, Telegram No. 836, April 17, 1941, attached to Ibid.

ひるがえってドイツ軍は、クレタへの大規模な空挺作戦を計画しつつあった。イギリスのインテリジェンスは4月28日に暗号を解読したものの、チャーチル首相はいささか楽観的に捉えていた<sup>28</sup>。また、クレタ防衛には防空能力の確保が不可欠であったが、苦戦が続くイギリス空軍機の消耗は激しく、別の拠点から戦闘機を移すことも難しかった。すなわち、クレタ防衛戦の前段階で、すでにイギリスは制空権の確保に支障をきたしていた。周辺の制海権を握る攻防も激化し、スダ湾の艦船に対するドイツ軍の爆撃が繰り返されるなかで、イギリスの航空戦力はますます減殺されていった<sup>29</sup>。

さらに、クレタの連合軍総司令官を務めた第2ニュージーランド派遣軍のバーナード・フレイバーグ (Bernard Freyberg) 少将は、空挺攻撃の要地と目されたマレメ飛行場の防衛を重視せず、その周辺に配備された守備隊はわずか620人であり、部下の不安をよそに兵員の増強も見送られた<sup>30</sup>。同飛行場が脆弱な急所となったことは、クレタ防衛戦の帰趨を左右する重大な要因となる。加えて、同島に駐留するイギリス軍とオーストラリア・ニュージーランド両軍からなる英連邦軍は、ギリシャ本土やエジプトからの合流部隊も含めると総計で3万人弱という規模であった反面、戦闘機は36機ときわめて少なく、その多くは整備も追いついていなかった<sup>31</sup>。

一方の枢軸国側からみれば、北アフリカから中東にかけて広がるイギリスの勢力圏に攻勢をかける号砲として、クレタの奪取は象徴的な重要性を帯びていた。同島を足掛かりとして、ドデカネス諸島やキプロスなどの地中海の島々から中東に至るまで、枢軸国側の支配地域を拡大する構想が掲げられた<sup>32</sup>。その意味で、クレタをめぐる攻防はイギリスにとって、広域的な帝国防衛の観点からも看過できないはずであった。だが、あらゆる場所で戦力の増強が要求されるなかで、北アフリカや中東よりもクレタの優先順位が上がるのは5月中旬を待たなければならず<sup>33</sup>、その対応は遅きに失していた。

## イ クレタ防衛戦と撤退戦の諸相

1941年5月20日の早朝、「メルクール作戦 (Unternehmen Merkur)」と名付け

28 チャーチルは、この空挺攻撃が「パラシュート部隊を殺す好機 (a fine opportunity for killing the parachute troops)」になると表現していた。From Churchill to Wavell (Commander-in-Chief Middle East), Telegram No. 63822 (MO5), April 28, 1941, attached to Note by Bridges (Secretary, War Cabinet), "Crete," May 26, 1941, CAB 66/16, TNA.

29 Stubbs, "Reappraising the Royal Air Force Contribution to the Defense of Crete, 1941," pp. 470–472, 477–478.

30 Ibid., p. 479.

31 Buckley, *Greece and Crete 1941*, p. 155.

32 Ibid., p. 162.

33 Prince, "Air power and evacuations," p. 74.

られたドイツ軍の大攻勢をもって<sup>34</sup>、クレタの戦端が開かれた。ギリシャ本土やドデカネス諸島を押さえたドイツ空軍(Luftwaffe)の爆撃機に支援され、降下猟兵(Fallschirmjäger)と呼ばれる空挺部隊がマレメ飛行場を中心とする島の北部に降下し、数次にわたる波状攻撃が実施された<sup>35</sup>。しかし実のところ、悪天候や攻撃の不手際もあってドイツ軍は多大な犠牲を出し、当初の目的をまったく達成できなかった。ところが、対する守備隊の統制も大いに乱れ、マレメ飛行場を見下ろす陣地を早々に放棄してしまったため、結果的に守備の脆かった同飛行場もドイツ軍に制圧された<sup>36</sup>。最大の要地の1つであるマレメ飛行場を失ったことで、連合国側はにわかに劣勢に追い込まれた。

また、空挺降下に先立つ海上での戦闘ではイギリス海軍が善戦したが、陸上戦の進展に伴ってドイツ空軍が地上支援から海上攻撃に転じると、制海権をめぐる戦いの大勢も決した。航空支援を欠いたイギリス海軍はドイツ軍の急降下爆撃機による攻撃に晒され、上陸の阻止もままならなくなった挙句、地中海艦隊はクレタからの後退を余儀なくされた<sup>37</sup>。この局面において、ギリシャの王室と同国政府は爆撃をかくぐって派遣されたイギリス海軍の艦艇に乗り込み、辛うじてクレタから脱出した。この後、ギリシャ国王ゲオルギオス2世(King Georgios II)は、終戦までイギリスに滞在することになる<sup>38</sup>。

航空機や対空砲の不足に悩まされた連合国軍にとって、ドイツ軍との戦力差は埋めがたいものであった<sup>39</sup>。5月27日にドイツ軍がクレタへの上陸を開始すると、敗色濃厚な状況下で、イギリス海軍の任務は地上部隊の撤退支援へと変質せざるを得なかった<sup>40</sup>。ここでイギリス本国の司令部もクレタからの撤退を認める決定を下したが、連合国軍は撤退戦の過程でドイツ軍のさらなる猛攻を受け、北部の各拠点から中央の山岳地帯を越えて南部に退却した部隊は、とりわけ険しい行軍を強いられた。数日間にわたる撤退戦を経て、イギリス海軍の支援を受けた連合国軍がエジプトに脱出した後、

34 ドイツ側の動向については、Heinz A. Richter, *Operation Merkur: Die Eroberung der Insel Kreta im Mai 1941* (Ruhpolding: Verlag Franz Phillip Rutzen, 2011).

35 Ebd., S. 80–90.

36 Buckley, *Greece and Crete 1941*, pp. 173–210; Richter, *Operation Merkur*, S. 106–141.

37 WM (41) 52nd Conclusions, May 22, 1941, CAB 65/18, TNA; Minutes of COS (41) 185th Meeting, May 22, 1941, CAB 79/11, TNA. 以下も参照。Prince, “Air power and evacuations,” pp. 76–77.

38 Buckley, *Greece and Crete 1941*, pp. 211–216. なお、近代ギリシャ国家とイギリスの深い関係は王室同士の姻戚関係にも表れており、当代のイギリス女王エリザベス2世(Queen Elizabeth II)の夫君であるエディンバラ公爵フィリップ王配(Prince Philip, Duke of Edinburgh)もギリシャ王家の血筋を引いている。君塚直隆『エリザベス女王——史上最長・最強のイギリス君主』(中公新書、2020年)41頁。また、近代ギリシャの王室の歴史は、Κώστας Μ. Σταματόπουλος, *Περί της βασιλείας στη Νεώτερη Ελλάδα*, Β΄ Έκδοση (Αθήνα: Εκδόσεις Καπόν, 2016)を参照。

39 From Lampson (Cairo) to Foreign Office, Telegram No. 1528, May 26, 1941, A/26, FO 954/15, TNA.

40 Prince, “Air power and evacuations,” p. 77.

6月1日にはクレタ全島がドイツ軍に占領されるに至った<sup>41</sup>。

前述した約3万人のクレタ守備隊のうち、イギリス軍は約1万5,000人、英連邦軍が1万4,000人弱であったが、一連の戦闘を経てエジプトに脱出できたのは全体の52%に過ぎず、特に前者は兵力の57%を失うという大損害を被った。また、クレタ防衛戦とそれに続く撤退戦を通して、イギリス海軍の戦死者も2,000人を超え、巡洋艦3隻と駆逐艦6隻が撃沈されたほか、戦艦2隻と空母1隻を含む多数の艦艇が深刻な損傷を受けた<sup>42</sup>。地中海艦隊は戦闘力の4分の1を失い、しかも喪失した艦艇の3分の1は撤退戦の時期に集中するなど、航空機による支援を欠いて多大な犠牲を払った状況が浮き彫りとなった<sup>43</sup>。

いずれにせよ、ギリシャ本土に続いて戦略上の要衝であったクレタを失ったことは、イギリスと連合国にとって痛恨であった。そして、ナチ・ドイツの支配下に入ったクレタは、1945年の終戦によって解放されるまで、ギリシャ本土と同様の苛酷な運命を辿った<sup>44</sup>。また、東地中海におけるイギリスの制海権も大きく揺らぎ、同国はその後も厳しい戦いを強いられることになる。その象徴となったのが、次に取り上げるマルタであった。

## (2) マルタ包囲戦

### ア マルタをめぐる攻防とイギリスの対応

先に触れたように、地中海の中央に浮かぶマルタは、この地域におけるイギリス海軍の拠点として特別な地位を与えられてきた。第二次世界大戦においては、海上交通の要衝という性質も相俟って、同島の存在は連合国と枢軸国の双方から注視された。前者にとっては枢軸国側の北アフリカへの補給を妨害するうえで絶好の位置にあり、ひるがえって後者はそれを阻止するべくマルタの制圧を企図した。ここに、同島が地中海戦域の焦点として浮上することになる。

1930年代後半、戦火を警戒したイギリス海軍は、地中海艦隊の拠点をマルタからエジプトのアレクサンドリアに移していた。開戦後の1940年末、シチリアにドイツ空軍が派遣されると、マルタの中心都市ヴァレッタの港湾であるグランド・ハーバー（Grand

41 Buckley, *Greece and Crete 1941*, pp. 261–290; Prince, “Air power and evacuations,” pp. 77–80. 以下も参照。WP (41) 125 (Also COS (41) 357), Weekly Résumé (No. 92) of the Naval, Military and Air Situation, June 5, 1941, CAB 66/16, TNA.

42 Buckley, *Greece and Crete 1941*, pp. 290–292; Symonds, *World War II at Sea*, p. 102.

43 Prince, “Air power and evacuations,” p. 80.

44 Mark Mazower, *Inside Hitler's Greece: The Experience of Occupation, 1941–44* (New Haven: Yale University Press, 1993); Harald Gilbert, *Das besetzte Kreta: 1941–1945* (Ruhpolding: Verlag Franz Phillip Rutzen, 2014)などを参照。

Harbour) が激しい空襲の標的となった。当地の部隊は敢然と反撃し、チャーチル首相も強固な防空態勢を維持する必要性を強調した<sup>45</sup>。また、マルタに特有の要素として、現地の人々の献身的な協力も多々みられた。植民地帝国という支配・被支配の関係を超えて、危機意識を共有したイギリスとマルタの人々の間には、一種の連帯感が生じていた。カトリック教会の動員力が果たした役割は大きかったし、飛行場の滑走路を修繕する危険な作業にも多くの住民が加わったという。このような両者の強い結束は、大戦中のマルタの立ち位置を一層際立たせている<sup>46</sup>。

さりとて、枢軸国側が包囲戦を展開するなかで、マルタにおける燃料や物資の不足は深刻化し、航空機の増援にも支障をきたすようになった<sup>47</sup>。クレタの陥落後は、次なる標的としてマルタへの空襲も苛烈さを増した。折しも北アフリカ戦線での攻防が激化する時期と重なり、マルタ包囲戦は地中海戦域の行方を左右する重大な局面に入っていた。独ソ戦の開始によって大量のドイツ軍が地中海から引き抜かれたこともあり、地中海艦隊とイタリア海軍 (Regia Marina) の制海権をめぐる争いでは前者が若干の優位にあったが、この状況もシチリアのドイツ空軍が再び兵力を増強するにつれて崩れていく<sup>48</sup>。

#### イ 包囲戦の激化とマルタの苦境

1942年に入ると枢軸国側の攻勢がますます強まり、マルタをめぐる状況も厳しさを増した。その一方で、前年末にアメリカが大戦に参戦したことや、アジア太平洋における日本の躍進によって、皮肉にもイギリスは地中海とヨーロッパに戦略上の重心を移すことができた。チャーチル首相は、地中海の確保がヨーロッパはもとより太平洋の戦略上も重要であり、帝国の権益の保持にもつながるといふ思惑から、地中海戦域を一義的な戦略目標に据えるようアメリカ側に訴えた。この試みが成功したことで、地中海におけるイギリス帝国の危機的状況を、アメリカの支援によって救うという奇妙な構図が生じたのである<sup>49</sup>。しかし同時期、マルタを拠点とする陸上部隊と潜水艦は

45 WM (41) 8th Conclusions, January 20, 1941, CAB 65/17, TNA.

46 Holland, *Blue-Water Empire*, pp. 217–218, 253–254; Anastasia Yiangou, “The Political Impact of World War II on Cyprus and Malta,” *Journal of Mediterranean Studies*, vol. 23, no. 1 (2014), pp. 106–107.

47 From Foreign Office to Cairo, Telegram No. 722, March 14, 1941, CAB 65/22, TNA.

48 Eric J. Grove, *The Royal Navy since 1815: A New Short History* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2005), p. 195; Holland, *Blue-Water Empire*, pp. 255–256. 以下も参照。Austin, *Malta and British Strategic Policy 1925–43*, chaps. 8, 9. また、この点を議論した戦時内閣の閣議録として、WM (41) 138th Conclusions, December 29, 1941, CAB 65/20, TNA.

49 Simpson, “Superhighway to the World Wide Web,” pp. 64–65; Kennedy, “Sea denial, interdiction and diplomacy,” pp. 56–58. このようなイギリスの思惑に対して、アメリカの反発も少なくなかった。Delaney, “Churchill and the Mediterranean strategy,” pp. 8, 10; French, “British Military Strategy,” p. 39. 第二次世界大戦期のイギリス帝国とアメリカの複雑な関係を論じた浩瀚な著作として、Wm. Roger Louis, *Imperialism at Bay: The United States and the Decolonization of the British Empire, 1941–1945* (London: Clarendon Press, 1977) も参照。

枢軸国側の猛烈な爆撃に耐え切れず、ジブラルタルなどへの退避を余儀なくされた<sup>50</sup>。連合国内ではマルタの防衛能力に対する懸念も大きくなり、イギリス政府は対応に苦慮していた<sup>51</sup>。

地中海艦隊の司令長官アンドリュー・カニングム（Sir Andrew B. Cunningham）提督は、当地の補給線を維持するためにも、マルタとアレクサンドリアの連絡を脅かすドイツ軍の制空権を奪取する必要性を痛感していた。同島の戦力の増強はもちろん、イギリス空軍による最新鋭のスピットファイア（Spitfire）戦闘機の投入も望まれた。そして、マルタという天然の要塞に十分な補給をおこない、攻勢に転じるだけの能力を整えられるか否かが、同島の生存という問題を超えて、地中海戦域や北アフリカ戦線におけるイギリスの立場、ひいては連合国の命運をも左右すると考えられたのである<sup>52</sup>。

マルタを「無力化する（neutralize）」べく繰り返されたドイツ空軍の攻撃は、次第に無差別爆撃の様相を呈した<sup>53</sup>。ひたすら耐え忍ぶことを強いられた現地の人々の苦闘に対して、1942年4月24日にはイギリス国王ジョージ6世（King George VI）からジョージ・クロス勲章が贈られた。また、枢軸国側の戦略がこの時期に二転三転したのは、イギリスにとって幸運であった。独ソ戦の進展によって地中海のドイツ軍が再び手薄になったほか、枢軸国側が北アフリカ戦線を優先したため、独伊両国が構想していたマルタへの大規模な空挺攻撃も見送られた<sup>54</sup>。この間隙を縫うように、100機以上のスピットファイアが英米の空母を介してマルタに輸送され、地対空の反撃能力も徐々に向上していった<sup>55</sup>。

次なる喫緊の課題が、マルタへの物資の補給であった。イギリス戦時内閣にとって、陸軍2万7,000人と空軍4,500人が駐留する同島の重要性は、枢軸国側の補給線を断ちつつ連合軍の増援ルートを確保する戦略面の考慮も含めて、依然として自明であっ

50 I.S.O. Playfair, *The Mediterranean and Middle East, Volume III (September 1941 to September 1942): British Fortunes reach their Lowest Ebb* (London: HMSO, 1960), chap. 7.

51 Minute from Eden (Foreign Secretary) to Atlee (Lord Privy Seal), January 13, 1942, B/651, FO 954/14, TNA.

52 Confidential Annex, WM (42) 24th Conclusions, Minute 1, February 25, 1942, CAB 65/29, TNA. 以下も参照。Kennedy, "Sea denial, interdiction and diplomacy," pp. 58–59.

53 Report by the Secretary of State for the Colonies, "Malta," WP (R) (42) 17, Report for the Month of February 1942 for the Dominions, India, Burma and the Colonies, and Mandated Territories, March 25, 1942, CAB 68/9, TNA; WM (42) 47th Conclusions, April 13, 1942, CAB 65/26, TNA; The Chargé in the United Kingdom (Matthews) to the Secretary of State, 740.0011 European War 1939/21036: Telegram, London, April 16, 1942, *Foreign Relations of the United States* [以下 *FRUS* と略記], *Diplomatic Papers 1942, Volume II: Europe* (Washington: United States Government Printing Office [USGPO], 1962), Doc. 178.

54 Dennis Richards and Hilary St. George Saunders, *Royal Air Force 1939–1945, Volume II: The Fight Avails* (London: HMSO, 1954), pp. 209–210; Kennedy, "Sea denial, interdiction and diplomacy," p. 60. この空挺作戦は独伊でそれぞれ「ヘラクレス作戦 (Unternehmen Herkules)」、「C3 作戦 (Operazione C3)」と呼ばれた。

55 Kennedy, "Sea denial, interdiction and diplomacy," p. 61.

た<sup>56</sup>。「光栄ある、歴史的な抵抗 (splendid and historic resistance)」を続ける同島を救うべく<sup>57</sup>、イギリス海軍による複数の補給作戦が立案された。だが、1942年6月に実施された「ヴィガラス作戦 (Operation Vigorous)」と「ハーブーン作戦 (Operation Harpoon)」は、ともに散々な失敗に終わった。前者は1隻もマルタに辿り着けず、後者も到着した補給船は2隻のみ、輸送できた物資はわずか1万5,000トンという有様であった<sup>58</sup>。カニンガム司令長官は特に前者について、航空支援の欠如や対空兵器による迎撃能力の不足が祟ったと報告している<sup>59</sup>。クレタ防衛戦から続く連合国軍の課題が、ここでも露呈したのであった。

#### ウ 補給作戦の成功と戦局の転換

補給作戦の度重なる失敗は、これに続く作戦の成否がマルタの運命を死活的に左右することを意味した。チャーチル首相は「いかなる手段を用いてもマルタを救わなければならない」との決意を重ねて示したが<sup>60</sup>、激しい消耗戦を経て補給作戦に同行できる速力をもつタンカーはイギリスにほとんど残っておらず、適合する数少ない船舶が万が一にも次の作戦で失われれば、取り返しのつかない事態になると考えられた<sup>61</sup>。地中海の制海権が依然として枢軸国側の優位にあり、北アフリカの要地であるトブルクの陥落も不可避の情勢において、東地中海からの補給も困難であった。それでも、イギリスにとってマルタを見捨てることは論外であり<sup>62</sup>、イギリス海軍はジブラルタルから同島を目指す新たな輸送作戦を計画するに至る。

「ペDESTAL作戦 (Operation Pedestal)」と名付けられたこの作戦は、第二次世界大戦における最大規模の輸送作戦であった<sup>63</sup>。計画は1942年7月から動き出し、イギリス各地の港湾に輸送船が集められた。この時点で、食糧を除いて最も緊急性の高い物資は石油であった。しかし上述のように、イギリス海軍はマルタの需要を満たし得る大きさの、しかも船団の速力に対応できるタンカーを準備できなかった。そこ

56 Confidential Annex, WM (43) 60th Conclusions, May 10, 1942, CAB 65/30, TNA. 陸軍の兵員には8,900人のマルタ人も含まれている。

57 *Parliamentary Debate [Hansard]*, House of Commons, 5th Series, Vol. 380, May 20, 1942, col. 219.

58 S.W. Roskill, *The War at Sea 1939–1945, Volume II: The Period of Balance* (London: HMSO, 1956), p. 73, Table 2.

59 Message from Cunningham to Pound (First Sea Lord), No. 626, June 17, 1942, B/665, FO 954/14, TNA.

60 Minute from Churchill to Atlee (Deputy Prime Minister), Eden and Hollis (Senior Assistant Secretary, War Cabinet), D 123/2, June 17, 1942, B/673, FO 954/14, TNA.

61 Extract from Minutes of COS (42) 181st Meeting, June 17, 1942, B/668, FO 954/14, TNA.

62 From Middle East Defence Committee to Air Ministry, Telegram No. IZ 649, June 21, 1942, attached to Confidential Annex, WM (42) 78th Conclusions, June 21, 1942, CAB 65/30, TNA; Part of COS (42) 187th Meeting, Minute 6, “Convoy to Malta,” COS (42) 56th Meeting (O), June 23, 1942, CAB 79/56, TNA.

63 同作戦の詳細については、Milan Vego, “Major Convoy Operation to Malta, 10–15 August 1942 (Operation PEDESTAL),” *Naval War College Review*, vol. 63, no. 1 (Winter 2010), pp. 107–153 も参照。

で、同盟国アメリカから、テキサコ (Texaco) 社の所有するタンカー「オハイオ (SS *Ohio*)」の提供を受けることになった。枢軸国側の激しい攻撃は十分に予想されたが、COSも特段の緊急性を認め<sup>64</sup>。チャーチル首相は、いかなる決定が下されたとしても、それを断固として支持するよう、戦時内閣の諸閣僚に要請した<sup>65</sup>。

8月2日にイギリスを出発した14隻の輸送船団は、8月10日にジブラルタル海峡を通過して地中海に入り、イギリス海軍の支援艦隊と合流してマルタに向かった。ネヴィル・サイフレット (E. Neville Syfret) 中將が率いる支援艦隊は空母3隻と戦艦2隻、巡洋艦および軽巡洋艦7隻、30隻以上の駆逐艦からなり、100機以上の戦闘機も参加した<sup>66</sup>。そして、8月11日から13日にかけて、輸送船団と支援艦隊は枢軸国側の猛烈な攻撃に晒されながら、マルタへの入港を試みた<sup>67</sup>。支援艦隊では空母「イーグル (HMS *Eagle*)」が魚雷攻撃で撃沈され、巡洋艦2隻と駆逐艦1隻も失われた。また、空母「インドミタブル (HMS *Indomitable*)」は大破してジブラルタルへの後退を余儀なくされたほか、同じく巡洋艦2隻が大破し、駆逐艦6隻が大小の損傷を負った。

一方の輸送船団も、14隻のうち9隻が沈没するという多大な犠牲を出しながら、最終的に4隻の輸送船がマルタに到着し、貴重な物資を送り届けることに成功した。さらにタンカー「オハイオ」も、幾重にもわたる集中攻撃で沈没する寸前まで追い込まれながら、8月15日の朝にグランド・ハーバーへの入港を果たした。港に集まった群衆は手を振って歓声を上げ、ブラス・バンドが愛国歌「ルール・ブリタニア (Rule, Britannia)」を演奏して同艦を迎えたという。マルタの人々にとって、「オハイオ」の入港はまさに「サンタ・マリアの奇跡 (Miracle of Santa Maria)」であった<sup>68</sup>。

「ペDESTAL作戦」を通じて、艦艇の被害に加えて30機以上の航空機を喪失するなど、連合国側の被った損失は決して小さくなかった。しかし、マルタには3万2,000トンの物資と1万5,000トンの燃料が供給され、それは同島が当面の生存を確保するのに十分な量であった<sup>69</sup>。「ペDESTAL作戦」はイギリスと連合国にとって、地中海戦域の状況を好転させ、反転攻勢に打って出る足掛かりとなった一方<sup>70</sup>、枢軸国側にとっ

64 Minutes of COS (42) 223rd Meeting, July 31, 1942, CAB 79/22, TNA.

65 Confidential Annex, WM (48) 101st Conclusions, Minute 1, August 1, 1942, CAB 65/31, TNA.

66 Roskill, *The War at Sea 1939–1945, Volume II*, p. 346, Table 27; Vego, “Major Convoy Operation to Malta, 10–15 August 1942 (Operation PEDESTAL),” p. 124; Hammond, *Strangling the Axis*, p. 114. 駆逐艦の隻数は文献によって若干の異同がある。

67 作戦の概要と戦闘の推移は、WP (42) 360 (Also COS (42) 373), Weekly Résumé (No. 154) of the Naval, Military and Air Situation, August 13, 1942, CAB 66/27, TNA.

68 Vego, “Major Convoy Operation to Malta, 10–15 August 1942 (Operation PEDESTAL),” pp. 137–142; Holland, *Blue-Water Empire*, pp. 259–260; Symonds, *World War II at Sea*, pp. 314–320.

69 その一方で、失われた物資も合計8万8,588トンにのぼると見積もられた。WP (42) 368 (Also COS (42) 379), Weekly Résumé (No. 155) of the Naval, Military and Air Situation, August 20, 1942, CAB 66/27, TNA.

70 同時期、イギリスは空母を用いてマルタの航空兵力を増援する作戦にも成功し、さらにジブラルタルから直接マルタに戦闘機を送る選択肢も具現化しつつあった。Minutes of COS (42) 86th Meeting (O), August 11, 1942, CAB 79/56, TNA.

ては重大な失策となった。折しも北アフリカ戦線の戦局が大きく動きつつあるなかで、独伊がマルタ包囲戦で勝機を逸し、補給作戦を阻止し得なかったことの意味は、その後の展開を考えても決して軽いものではあるまい<sup>71</sup>。

成功裡に終わった「ペDESTAL作戦」の直後に提出された報告書のなかで、サイフレット中将は困難かつ危険な任務を担った護衛艦隊の献身に言及し、なかでも補給船団の乗組員たちの振る舞いや勇気、決断力への敬意を表した。そして、この作戦で多くの命が失われたが、彼らの記憶は「航海を共にする榮譽に浴したすべての者を奮い立たせ続けるであろう」と最大限の賛辞を贈っている<sup>72</sup>。こうして、同作戦は地中海戦域や北アフリカ戦線、ひいてはヨーロッパ戦線の転換点において、その象徴的な事象として記憶されることになったのである。

### 3. 評価と課題

#### (1) 両事例の軍事的意義

以上のようなクレタとマルタの事例を踏まえて、ここでは両者を比較しながら軍事面の意義を抽出してみたい。2つの事例に共通する点としては、航空支援や対空兵器の重要性が挙げられよう。クレタ防衛戦では、ドイツ軍の空挺作戦を過小評価し、対空兵器の整備も追い付いていなかったため、総じて効果的な対応に失敗した。一連の戦闘で主導権を失った要因としては、空軍力の不足はもとより、イギリス側がクレタの周辺に利用可能な飛行場を欠き、ギリシャ本土やドデカネス諸島を利用できたドイツ軍との対照的な状況も重大であった<sup>73</sup>。クレタの連合軍総司令官を務めたフレイバーグ少将も、航空機による地上部隊への支援や、急降下爆撃による反撃がなければ、この地域で勝利を収めることはできないと振り返っている<sup>74</sup>。

一方、防空能力の不足に悩まされたのはマルタも同様であったが、ドイツ空軍の猛

71 Kennedy, "Sea denial, interdiction and diplomacy," pp. 61–63. 大戦中の地中海における独伊の軍事的関係は、Gerhard Schreiber, "Italy and the Mediterranean in the Power-Political Calculations of German Naval Leaders, 1919–45," in *Naval Strategy and Policy in the Mediterranean*, pp. 124–133. また、北アフリカ戦線の雌雄を決した戦いについては、Hammond, *Strangling the Axis*, chap. 6; 大木毅 『砂漠の狐』 ロンメル——ヒトラーの將軍の栄光と悲惨 (角川新書、2019年) 第8、9章など。

72 Report on Operation "Pedestal" by Vice-Admiral E.N. Syfret, August 25, 1942, *The London Gazette*, Supplement, No. 38377, August 10, 1948, p. 4505.

73 From Lampson to Foreign Office, Telegram No. 1549, 27 May 1941, A/65, FO 954/11, TNA; Confidential Annex, WM (41) 56th Conclusions, Minute 1, 2 June 1941, CAB 65/22, TNA; From Foreign Office to Angora, Telegram No. 1346, 2 June 1941, CAB 65/18, TNA. 電報の送付先の都市名はトルコの首都アンカラの古い綴りである。

74 From Lampson to Foreign Office, Telegram No. 1666, June 3, 1941, A/42, FO 954/15, TNA.

烈な空襲や爆撃に耐え、最終的に包囲戦を凌ぎ切った。スピットファイアを主軸とする戦闘機の移送が繰り返され、航空支援や対空兵器の補充も絶え間なく試みられたほか、同盟国アメリカの支援を得たことも決定的に重要であった<sup>75</sup>。また、増強されたマルタの戦闘機を活用した航空作戦も強化され、地中海戦域における戦局の好転とともに成果を挙げた。そのため、特に「ペDESTル作戦」が成功して以降は、マルタに対する空襲などの攻撃は急速に減少していった<sup>76</sup>。

さらに、地中海戦域はいうまでもなく海域を主たる舞台としており、海戦における航空機の存在感が高まるにつれて、戦闘機を発進させる空母の役割はますます大きくなった。空母を主体とする航空作戦と海上作戦の連動という特徴的な傾向は、クレタとマルタの事例においても明確に見出すことができる。むろん、それぞれの局面で戦いの帰趨を左右する要素として、陸上部隊の動向も無視できなかった。その意味で、第二次世界大戦は陸海空という3つの次元が複雑に絡み合う空前の規模の戦争であり、地中海戦域はその好例であったといえよう<sup>77</sup>。

加えて、空挺部隊の活用という観点からも、両陣営で異なる教訓が導き出されていることは興味深い。クレタの戦いを通じて、ドイツ側は空挺作戦の損害の大きさを深刻に捉え<sup>78</sup>、降下作戦に難色を示すことになったとしばしば指摘される。そして先に触れた通り、マルタへの空挺攻撃は棚上げにされ、枢軸国側は同島を攻略する時機を逸したのであった。ひるがえって連合国は、クレタを失陥する原因となった空挺作戦の効果に着目し、部隊の育成を急いだ。そして英米両国の空挺部隊は、ヨーロッパ戦線においては1944年6月のノルマンディー上陸作戦（Invasion of Normandy）や同年9月の「マーケット・ガーデン作戦（Operation Market Garden）」などの大規模作戦に投入され<sup>79</sup>、連合国の最終的な勝利に貢献することになる。

## （2）イギリスの帝国防衛における意義と限界

続いて以下では、イギリスの帝国防衛の視点から2つの事例を考察する。まず、クレタが枢軸国側の手に落ちたことは、ヨーロッパ戦線と北アフリカ戦線の双方に甚大な影響を与えるのみならず、地中海から中東にまで達するイギリス帝国の権益に対し

75 Confidential Annex, WM (42) 52nd Conclusions, Minute 3, April 24, 1942, CAB 65/30, TNA; Confidential Annex, WM (42) 73rd Conclusions, June 11, 1942, CAB 65/30, TNA.

76 作戦の翌週にドイツ軍の爆撃は一件も報告されておらず、9月に入っても目立った戦闘は起こっていない。WM (42) 118th Conclusions, August 25, 1942, CAB 65/27, TNA; WM (42) 121st Conclusions, September 7, 1942, CAB 65/27, TNA.

77 Ball, "The Mediterranean and North Africa, 1940–1944," p. 387.

78 イギリス政府も、クレタにおけるドイツ軍の損害は連合国を超える規模であったと分析している。WM (41) 56th Conclusions, June 2, 1941, CAB 65/18, TNA.

79 両作戦については、石津『総力戦としての第二次世界大戦』第7、9章。

ても、一層の脅威が高まることを意味した<sup>80</sup>。同島の失陥を経て6月10日に開かれたイギリス下院の審議において、この問題をめぐる混乱含みの激論が延々と交わされたことは、その衝撃の大きさを物語っていた<sup>81</sup>。クレタの守備隊の約半数が英連邦からの派遣軍で構成されていたことも相俟って、一連の事象はイギリス帝国全体に対する深刻な危機として捉えられたのである。

また、大戦の経験を通じて、「非公式帝国」たるイギリスのギリシャにおける影響力も決定的に低下した。1943年のイタリア降伏後、とりわけチャーチル首相は再び東地中海への関心を強めたものの、それはフランスを最優先する連合国の全体的な方針とは明らかに相容れなかった。さらに、戦時中に発生したギリシャ内戦への対応でも、チャーチルの強硬策はアメリカから「植民地主義」との強い批判を浴びた<sup>82</sup>。そして結局のところ、戦後のイギリスは自らの勢力圏として捉えていたギリシャ防衛の負担に耐え切れず、アメリカにその肩代わりを求めることになる<sup>83</sup>。すなわち、ギリシャ本土とクレタの失陥という一連の事象は、それに続くギリシャ内戦の顛末とも併せて、中東と東地中海におけるイギリス帝国の落日を暗示していた<sup>84</sup>。

一方、地中海の中央に浮かぶ要衝という地政学的な特徴をもつマルタは、「エンパイア・ルート」を維持するイギリスの帝国防衛にとって死活的な存在であった。同島を喪失するとなれば、北アフリカ戦線とも連動してエジプト防衛への甚大な影響は避けられず、なによりイギリス帝国にとって最大級の災厄になると考えられた<sup>85</sup>。地中海戦域の行方を左右したマルタ包囲戦は、直轄植民地としての性格も相俟って、そのままイギリス帝国の命運にも直結した。また、包囲戦という極限の状況を経て、イギリスとマルタの結束が高まったのも、帝国の中核たる同島の性格を抜きには語り得ない。その意味で、マルタの人々による英雄的な抵抗に対して国王から贈られたジョージ・クロス勲章は、単なる象徴的な意味を超えるものであった。

しかしその後、脱植民地化の奔流はマルタにもおよび、戦後復興をめぐる混乱を契機とした非常事態の発令と自治権の剥奪、直接統治への逆行といった事態を経て<sup>86</sup>、

80 The Chargé in Germany (Morris) to the Secretary of State, 740.0011 European War 1939/11503: Telegram, Berlin, May 31, 1941, *FRUS, Diplomatic Papers 1941, Volume II: Europe* (Washington: USGPO, 1959), Doc. 733.

81 *Hansard*, House of Commons, June 10, 1941, cols. 63–164.

82 Holland, *Blue-Water Empire*, pp. 269, 274–275. ギリシャ内戦については、村田奈々子『物語 近現代ギリシャの歴史—独立戦争からユーロ危機まで』(中公新書、2012年)第5章などを参照。

83 Melvyn P. Leffler, *A Preponderance of Power: National Security, the Truman Administration, and the Cold War* (Stanford: Stanford University Press, 1992), pp. 121–127, 142–146.

84 Maurice Vaïsse, *Les relations internationales depuis 1945*, 16e éd. (Paris: Armand Colin, 2019), p. 14.

85 From Air Ministry to Auchinleck (Commander-in-Chief Middle East), Telegram No. OZ 175, May 8, 1942, attached to Confidential Annex, WM (42) 59th Conclusions, May 8, 1942, CAB 65/30, TNA.

86 Simon C. Smith ed., *British Documents on the End of Empire, Series B, Volume 11: Malta* (London: The Stationery Office, 2006), pp. xxxv–xxxix.

1964年にマルタは独立を果たすことになった。そして70年代には、同島におけるイギリスの植民地支配の残影がいよいよ排除されていく<sup>87</sup>。このような歴史の経過から遡及的に考えるならば、第二次世界大戦はイギリスとマルタの関係にも決定的な影響を与えたといえよう。国際秩序の変動と価値規範の転換が連動した時代にあって、イギリスの帝国秩序はその限界を迎えつつあった。第二次世界大戦という未曾有の事態は、その1つの画期となったのである。マルタにとって、大戦の経験は帝国の終わりの始まりであった。

## おわりに

本稿では、第二次世界大戦における地中海戦域に着目し、イギリスの帝国防衛という視点から検討を試みた。具体例としてはクレタ防衛戦とマルタ包囲戦を取り上げ、それぞれの歴史的経緯を概観したうえで、その意義を考察した。

クレタとマルタの2つの事例は、第二次世界大戦における軍事面の特徴を浮き彫りにするものであった。両者に共通する要素として、航空支援が必須であったことに加えて、対空兵器などの防衛能力もきわめて大きな意味をもった。また、マルタの事例で顕著にみられたように、継続的な物資の輸送や戦力の増強は、とりわけ島嶼部の防衛には欠かせなかった。そのような増援策を可能にする航空路およびシーレーンの確保も、陣営を問わず戦略面の重要な目標となった。

一方、地中海という地域は、イギリスにとって帝国防衛の要地でもあった。植民地と「非公式帝国」からなる世界大の権益の維持という課題は、軍事的にも政治的にも国家の行方を左右し、それゆえに帝国の紐帯と結束を保つための方策が求められた。ヨーロッパ戦線や北アフリカ戦線の戦局にも影響する地中海戦域をめぐる、この地域で近代以来の海上覇権を握ってきたイギリスは、熾烈な戦いの中心で立ち回ることが否応なく迫られたのである。

そして、クレタやマルタといった個別の事例がイギリスの帝国防衛と連動し、それぞれの局面で重大な影響を与えたのみならず、その過程で生じた様々な問題は、戦後の国際政治の変容に関わる諸要素をも胚胎していた。国力を著しく疲弊させたイギリスが、帝国を保持したまま新たな局面に適応するのは至難の業であった。その意味で、イギリスにとって第二次世界大戦は帝国の命運を賭けた戦いであったと同時に、帝国

87 この点は、伊藤頌文「マルタ防衛協定更新問題とイギリス外交—東地中海における対外軍事関与と同盟政策の相克、一九七一一七二年」『法学政治学論究』第115号（2017年12月）115-147頁。

の構造が破綻する契機にもなったのである。「エンパイア・ルート」の要衝たる地中海を舞台とした攻防は、その1つの象徴であった。

(防衛研究所)

---

[付記] 本稿の執筆にあたり、2名の査読者より貴重なコメントを頂戴した。記して感謝申し上げたい。